

十分杯の広報活動

長岡と十分杯の歴史的なかかわりについて

権ゼミナール

10E010 宇尾野大樹 10E030 佐藤旭
11E043 三國弦

目次

はじめに

1. 十分杯概説

1. 1 十分杯の特徴、込められたメッセージ、ルート、各地の十分杯

- 1. 1. 1 特徴
- 1. 1. 2 メッセージ
- 1. 1. 3 ルート
- 1. 1. 4 各地の十分杯
- 1. 1. 5 長岡の十分杯

2. これまでの活動の紹介と成果

2. 1 これまでの活動の紹介と成果

- 2. 1. 1 昨年度行ったアンケート調査
- 2. 1. 2 十分杯が抱える問題
- 2. 1. 3 認知度アップの提案
- 2. 1. 4 昨年度の活動で得られたこと
- 2. 1. 5 昨年度の活動の中での反省点

2. 2 今年度の活動

2. 3 活動の中での疑問（歴史的な背景、整合性）

3. 長岡とのかかわり

3. 1 十分杯がいつ頃、どのような経緯で長岡に伝わったのか

3. 2 当時の江戸の経済事情

3. 3 牧野忠辰の統治時の長岡の経済事情

3. 4 長岡藩の三代藩主はどのような人物だったのか（エピソードなど）

- 3. 4. 1 忠辰が改定した法律
- 3. 4. 2 略歴
- 3. 4. 3 武の面での功績
- 3. 4. 4 忠辰の学問への姿勢
- 3. 4. 5 普段の生活の忠辰にまつわるエピソード

3. 5 三代藩主を尊敬した九代藩主とその証としての蒼紫神社

- 3. 5. 1 芸術面での功績
- 3. 5. 2 蒼紫神社に3代藩主忠辰を祀る

3. 6 さらに長岡市の発展に尽力した牧野家15代当主牧野忠篤

おわりに

はじめに

私たち権ゼミナールは地域活性化の活動の一環として一昨年度から十分杯という杯の広報活動を行ってきた。そもそもこの活動は、「十分杯を題材にして長岡市を盛り上げるために使うことができるのではないか」、という問題意識のもとでスタートした。しかし、この十分杯という杯のことを初めからゼミのメンバーは知っていたわけではなく、見学先の企業で偶然の出会いが活動を始めるきっかけとなったようである。

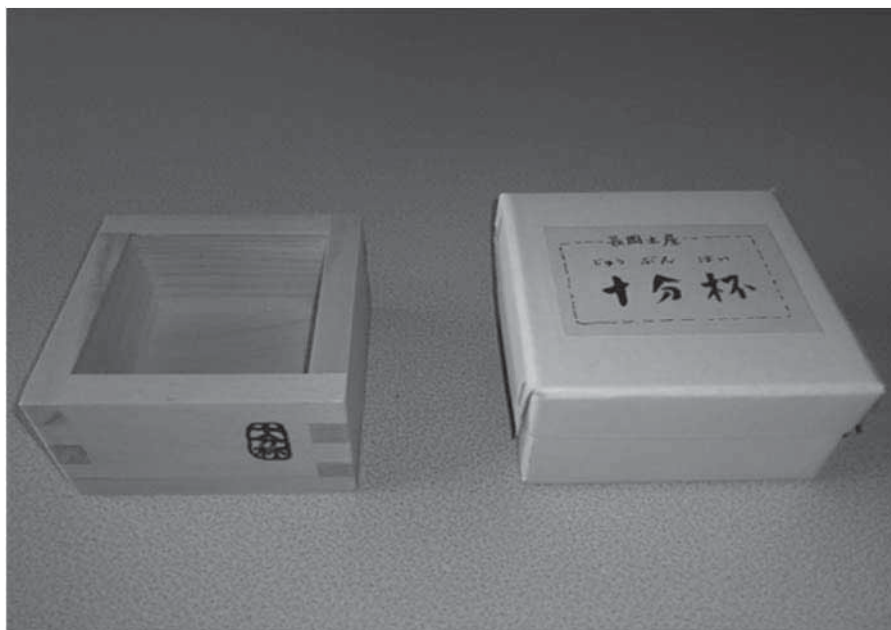
当初、権ゼミナールは‘現場から経済を学ぶ’ということで、企業見学をゼミナールの主な活動としていた。そして、たまたま2011年に見学先としてから長岡市南陽2丁目にある長岡歯車製作所の長岡歯車資料館を訪れた。この時の目的は多くの機械に欠かさない歯車について勉強することと、長岡の機械工業史を勉強するためだったようだが、見学の最後にお土産として販売されていた資料館の館長内山弘氏が自ら製作した珍しい酒枘〈図1〉と同じものを紹介された。この時の酒枘が十分杯だった。

実は十分杯はあまり長岡市民に認知されてはいないものの、私たちが普段生活している長岡と関わりが非常に強いことも訪れた先輩達を驚かせた一因だったようである。

そして、内山弘館長が十分杯を広める活動をしていると聞き、一緒に活動し、お手伝いをしようとかかできることはないだろうかと考え、出来る限りの広報活動をすることを決めたそうである。この時点では「長岡市民の十分杯に対する認知度アップ」と「十分杯関連の商品化」という目標を掲げ活動を行っていた。

この活動に2012年度から私も参加し、アオーレ長岡での広報活動を中心に活動を行った。

〈図1〉木の枘の十分杯



(注) 長岡歯車資料館館長内山弘さんが製作した木の枘の縁にサイフォン原理を仕組んだ十分杯である。特許取得済み。

1. 十分杯概説

1. 1 十分杯の特徴、込められたメッセージ、各地の十分杯

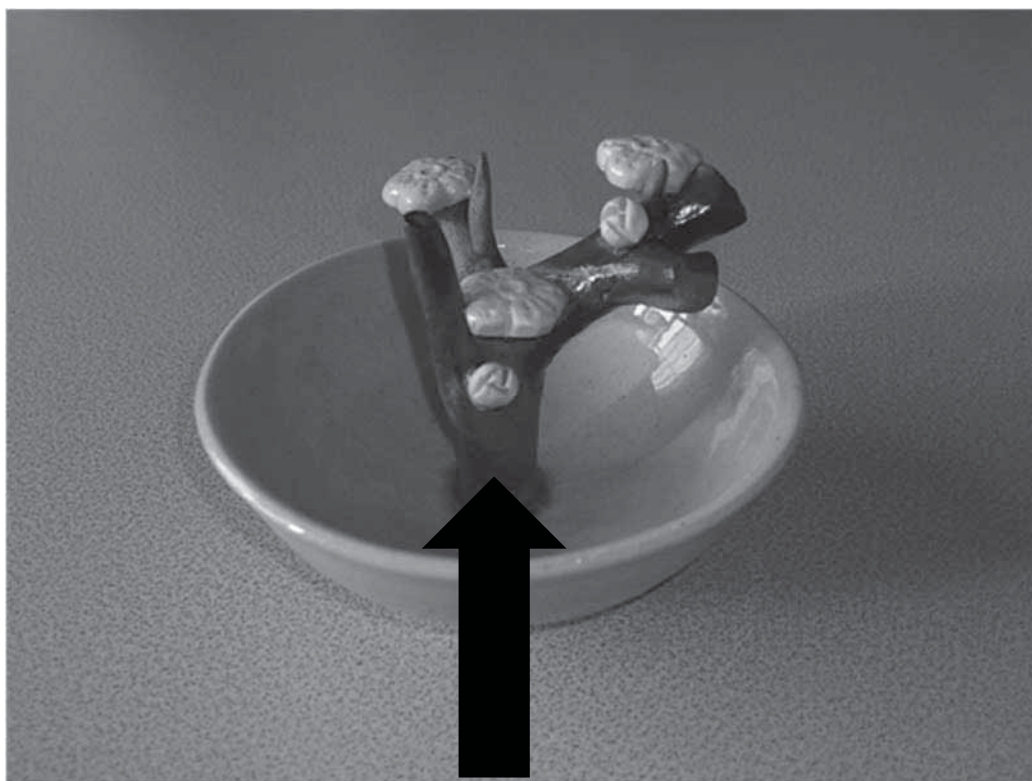
1. 1. 1 特徴

十分杯は陶器やグラスなど様々な形のものが存在し、多くの十分杯に共通していることは、①（図1）の写真のように底に穴があいている、②（図2）の写真のように真ん中に柱が立っており、その中に管が通っている、③一定の量（8分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまうため、杯の中は空になるなどの3点が挙げられる。この十分杯の仕組みにはサイフォンの原理というものが使われている。

サイフォンの原理とは、サイフォン（チューブ、管）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量がかなりあれば管一本で解決できる非常に便利なものである。この原理はトイレの水道管、消火器、灯油ポンプなど私たちの身近にも使われている物がある。

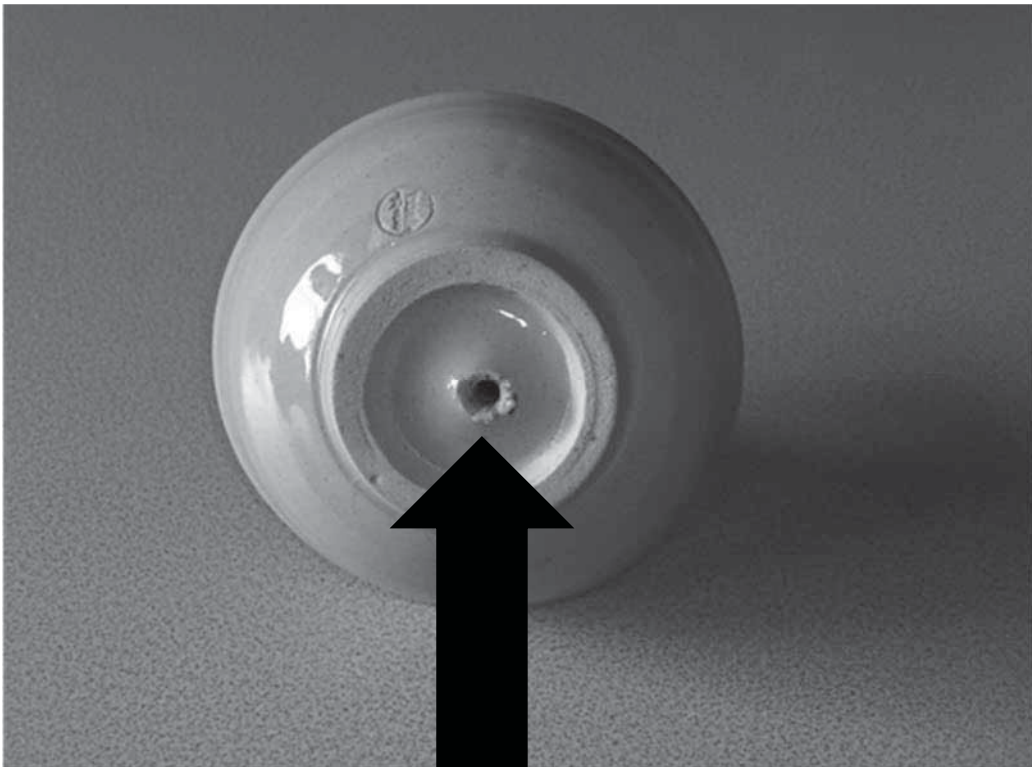
お酒を飲む際は中央にある飾りが鼻についてしまい、非常に飲みにくいものとなっているため実用性はあまりない。しかし、十分杯という杯は目でも十分に楽しむことができる杯である。十分杯の飾りは非常に数多くの種類があるため、季節や行事によって飾るものを変えることでインテリアとしての役割も果たすことができる。

〈図2〉十分杯の飾り



（注）杯の中央にある梅の飾りの中に管が取っている。

〈図3〉 十分杯の底の穴



(注) この穴と〈図2〉の飾りに隠れている管がつながっている。

1. 1. 2 メッセージ

杯の仕組み、外観上の特徴だけでなくこの十分杯に込められているメッセージも素晴らしい。十分杯には「何事もほどほどに」という戒め、儉約、自分の身の丈を知る（足るを知る）などの教えが十分杯には込められている。多くの人は過度な欲望に打ち勝てない。この十分杯を見て「足るを知る」という教えを思い出すことで欲望を自制することができる。そして「ほどほどに」、「これくらいで足りている」と思うことが、自分の幸せのためになるのではないだろうか。

1. 1. 3 ルート

十分杯と長岡とのかかわりは約300年になるが、日本で発祥したものではない。世界中に同じような原理が使われている物が名前や名称は異なるものの残っている。では、十分杯はどのようなルートを通して日本に伝わったのだろうか。

十分杯の発祥の地はギリシャのようである。日本に伝えられるまでのルートは正確なことはわかっていないが①ギリシャ→シルクロード→中国→琉球→日本、②ギリシャ→シルクロード→中国→朝鮮半島→日本の二通りのルートだと考えられている。その根拠は各地に十分杯と同じ仕組みのカップや杯が存在しているからである。

1. 1. 4 飾りの中の仕組み

十分杯にはサイフォン（ギリシャ語でチューブ、管）の原理というものが応用されている。十分杯の底から水が漏れるのを理解するには、このサイフォンの原理というものを理解しなければならない。

サイフォンの原理とは、サイフォン（チューブ、管）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量がかなりあれば管一本で解決できる非常に便利なものである。

このサイフォンの原理を理解するために、まず、コップ（入れ物）の中の水を外に移すにはどうしたらいいかを考えてみよう。サイフォンの原理が仕掛けられていない普通のコップの場合は傾けてやるしかない。しかし、サイフォンの原理を活用すると、傾けずに殆どすべての水を出すことができる。コップ（入れ物）の中に外と通じるパイプをつなげればいい。十分杯の場合は、パイプを隠すために飾りとなっているのである。つまり、飾りの中を管が貫通しているのである。

地球上に存在する全てのものは地球の引力に引っ張られているため、何の支えもなければ必ず地面や水面に落ちるようになっている。当然、水も例外ではない。ここで、下に示した〈図7〉を見てほしい。左図のコップの水には重力は働くが、水を囲む高くて丈夫な壁の存在と、パイプの中の水圧と大気圧の大きさが同じであるため、水は普通のコップと同じように傾けない限り移動させることはできない。ところで、このコップに水を注ぎ足すと考えてみよう。どうなるだろうか。

コップの中の水が増えるのと同時に突起の中の管内の重力が高まるようになる。重力が高まるにつれて水圧も高まる。そして、突起内の管の最高点まで水が到達すると、水圧 > 大気圧となり、重力が働き、水は移動する。

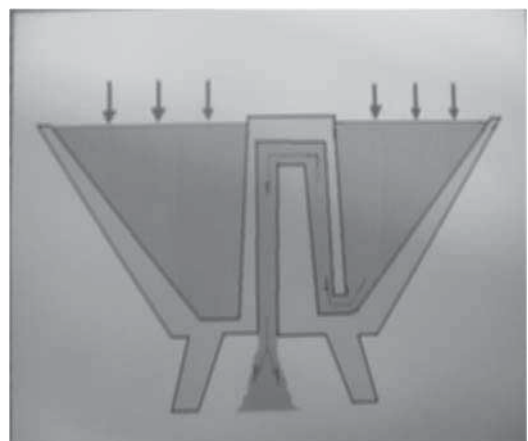
〈図4〉は液体が十分杯に八分目まで注がれた状態である。そしてそれ以上液体を注ぐと〈図5〉のように液体が管を通して底の穴から液体が全て出てしまう。

〈図4〉 十分杯の断面図1
八分目までの状態



(出所) 太刀川喜三氏製作資料

〈図5〉 十分杯の断面図2
八分目以上入れた状態



(出所) 太刀川喜三氏製作資料

1. 1. 5 各地のサイフォン杯

①ピタゴラス杯〈図6〉

十分杯の起源は約2500年前のギリシャの数学者で哲学者でもあったピタゴラスにあると言われているそのため、この杯に彼の名前がついている。

長岡の十分杯との違いは飾りには特徴がなく、杯の外側に絵が描かれていることがある。因みにギリシャでは観光商品として定着している。

〈図6〉ピタゴラス杯



(出所)

<http://fountaceramics.gr/en/Pythagoras%20cup/Gold%20archaic%20presentations.html>

〈図7〉ピタゴラス杯



(出所)

<http://www.flickr.com/photos/86682180@N00/5792619533/in/set-72157626789537972>

②中国の敬器¹〈図8〉

現状の中国にもサイフォン杯はある。ところが中国の歴史に記録されている‘足るを知る’という教訓を伝えていたのは今のサイフォン杯とは形が異なるが、戒めの杯としては、もっとも古いものといえる。ここでは、面白さよりは教訓を重視し、敬器を紹介したい。

敬器は日本語ではイキ、中国語では yilqi4 (イーチ) と発音する。そして、宥坐之器 (ユウザノキ) という別の名称もある。つまり坐宥の銘とはここから生まれたのである。

この敬器が有名になったのは孔子(紀元前 551-紀元前 479)にまつわるからであるが、荀子の宥坐編に紹介されている逸話を紹介したい。孔子は弟子たちと一緒に魯国にあった桓公の廟を参拝しに行った時に、儀式の際に使う儀器を目にした。ところが、形が変わっており、その所以について廟守りに聞いた。

¹ 中国の敬器に関しては権ゼミが製作した「十分杯を知っていますか」というホームページより抜粋した。

孔子：“あれは何の器ですか。”

廟守り：“桓公（?-BC643、中国の春秋戦国時代の齊国の王だった人物。当時の中国には約3,000の大小の国があったが、その中でも大きな国は五つほどだったようである。それらの国を春秋五覇と言ったが、齊国もそのうちの一国だった。そして、桓公はその齊国の君主だった。仲がいつも近くに置き、座右の銘にしていらっしやった器（宥坐之器；宥という字は一般的に許すという意味がありますが、右の意味もあります。それで、いつも右において心の乱れが生じたときに見る物という解釈ができるのではないかと思う。）である。

孔子：“わかった。その使い方がわかった。

孔子は弟子たちを見回りながら、語った。

孔子：“水を器に注いでみなさい。”

一人の弟子が水を汲んできてゆっくりと注いだ。みんな息を飲んで見ていた。

空っぽの器は水が少し入ると、傾き始めた。そして、器の真ん中まで水が入ったら安定して正しい形になり、器がいっぱいに近づくや否やひっくり返ってしまい、中の水が全部消えてしまった。

皆、大変珍しくまた、面白くて何も言えず、孔子を見るばかりだった。孔子は手を打ちながら感嘆した。

孔子：“そうだね。世の中には満ちてひっくり返らないものはないものだね”

子路：“先生、この器が空いていたときは傾いており、真ん中ぐらいに水が入っていたときは正しく立ち、満ちた時はひっくり返ってしまいましたね。ここに何の道理があるのでしょうか。”

孔子が弟子に答えた。

孔子：“そうとも。人もこの傾いた器と同じである。聡明で博識な人は自信の愚かな面を見なければならぬし、功績が高い人は謙虚で遠慮しなければならぬ。また、勇敢な人は恐れなければならぬ、豊かな人は節約しなければならぬ。謙虚に退けば損をしないということもこれと同じ道理だ。”

原文は以下の通りである。

孔子觀於魯桓公之廟、有欹器焉。

孔子問於守廟者曰、此謂何器。

守廟者曰、此蓋為宥坐之器。

孔子曰、吾聞宥坐之器者、虛則欹、中則正、滿則覆。

孔子顧謂弟子曰、注水焉。

弟子挹水而注之、中而正、滿而覆、虛而欹。孔子喟然而嘆曰、吁。

惡有滿而不覆者哉。

子路曰、敢問持滿有道乎。

孔子曰、聰明睿智、

守之以愚、功被天下、守之以讓、勇力撫世、守之以怯、富有四海、守之以謙。
此所謂損之又損而之之道也。

『荀子』の宥坐編

要するに、敬器は、心の乱れが起きることを戒めるために近く（右）においておいた物である。そのため、その教訓として「足るを知る」が強調されている。人間を動かすのは利害であり、その根底には欲がある。ところが、その欲が身の程を過ぎてしまったら、それまでの貯えが全部消えてしまう恐ろしい状況になってしまう。腹八分目という言葉はまさに十分杯のメッセージと重なるところがある。かといって、何もかも遠慮するということはないだろう。あくまで身の程を知り、自身を戒め、節制するということに尽きる。

〈図8〉中国の敬器



〈図9〉戒盈杯



(注) この敬器は長岡歯車資料館館長
内山弘氏が製作したものである

③朝鮮半島の戒盈杯 〈図9〉

朝鮮半島にどのようなルートで伝わったかは不明だが、長岡の十分杯と全く同じ仕組みの杯がある。ただ十分杯は飾りの種類が非常に多いが戒盈杯はそうでもなく、飾りを楽しむことはあまりないようである。ところが青磁や白磁であるため、非常に品がある。また漏れて落ちてくる酒をためておく入れ物がついているのも特徴の一つである。その名は‘盈る（みちる）ことを警戒する’という意味を持つ戒盈杯（ゲーヨンベ）日本の読み方では（かいえいはい）である。記録上では、朝鮮の後期に作られたようである。白磁職人が大もうけをした後、酒や女遊びにふけたあげく、多くのものを失ってしまった。そこで、初心に戻り、全身全霊で作上げたものが戒盈杯だと言われている。それが歴史ドラマとして放映され、多くの人々が見たようである。また、朝鮮後期の巨商が自身を戒めるために常にそばに置いたとも言われている。韓国では、政治家からのプレゼント、新婚さんへのプレゼントとして普及し始めているようである。しかし、まだまだ日本同様、知名度が低いのは同じようである。

④石垣島の教訓茶碗〈図10〉

教訓とは‘欲張り過ぎるとすべてを失ってしまう’や‘欲張りすぎるとしっぺ返しがかかる’という古人の教えのことである。その「教訓」がそのまま茶碗としてカタチになったのが教訓茶碗である。

教訓茶碗には【宮良殿内の「八分さかずき」】として以下のような物語が伝えられている。約230年前石垣島に宮良殿内に渡来物として贈答された1個のさかずきがあった。8分目以上にお酒を入れると底からスーと抜けてしまう。この不思議さに宮良家では家宝同様に扱って大切に保管してきた。とはいっても来客にはこれを見せ、あるいは使って「驚き」を分かち合い「教訓」話のネタにしていたからタダの家宝ではない。コミュニケーションの手段としても大いに役立っていた。だから石垣島をはじめとする沖縄では宮良殿内の「八分さかずき」として知る人ぞ知るであった。これもピタゴラス杯同様観光商品として売られている。

〈図10〉石垣島の教訓茶碗



(出所)

http://www.ishigaki-navi.net/p_chawan.html

〈図11〉山形県の八分杯



(出所) <http://blogs.yahoo.co.jp/omoya>

[1137/3129471.html](http://blogs.yahoo.co.jp/omoya/1137/3129471.html)

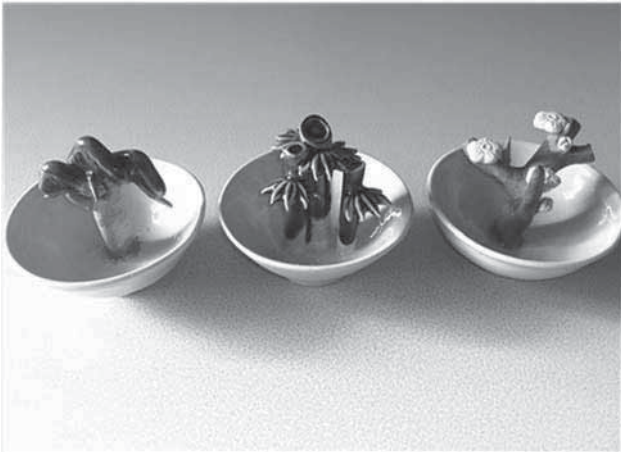
⑤山形の八分杯〈図11〉

山形県では「八分杯」という名となっている。非常に分かりやすい名である。

その昔、とあるお殿様が家臣の欲をいさめる為、考え出されたと言われている。もしかすると殿様とは牧野家3代藩主のことだったかもしれない。八分盃の意味は「腹八分目」から来ており、家臣が腹を満たそうと欲張って注ぐとサイフォンの原理によりお酒が下の穴から全て流れ落ちてしまう様に作られている。飾りにのっているものが違うだけで基本的には「十分杯」と最も近い。名前だけが違うのである。

各地の十分杯を紹介したが〈図1〉の十分杯のように長岡には様々な人が製作した十分杯がある。

〈図 1 2〉松竹梅の十分杯



(注) 北越銀行 110 周年を記念して製作されたもの。

〈図 1 3〉龍の飾りの十分杯



(注) 長岡高校 140 周年を記念して長岡高校総合総会が製作したもの。

〈図 1 4〉宮川香山が作った十分杯



(注) 牧野家 15 代当主である牧野忠篤が初代長岡市市長に就任した際に記念品として地元の有力者たちに配ったと言われている十分杯。
宮川香山は高浮彫り、真葛焼きの創始者であり、別名真葛香山とも言われている明治を代表する陶工である。

〈図 1 5〉 蒼紫神社の県社昇格記念に
製作された十分杯



〈図 1 6〉 金属でつくられた十分杯



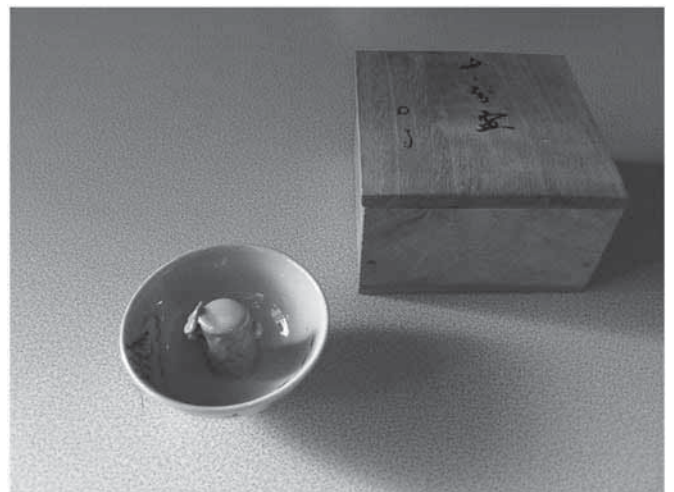
(注) 長岡歯車資料館館長内山弘さんが
製作した
金属で出来ている十分杯である。

〈図 1 7〉 鳩の十分杯



(注) 長岡市立阪之上小学校百周年の記念
に製作されたもの。

〈図 1 8〉 昭和初期にお土産として
作られた十分杯



(注) 悠久焼の十分杯

2. これまでの活動の紹介と成果

2. 1 昨年度までの活動

昨年度までは本当に様々なイベントに参加しながら広報活動を行ってきた。一番初めに昨年度の4年生である先輩たちが取り組んだのが本学で行われているヒューマン・パワーアップ・プロジェクトへの参加だった。このプロジェクトに採用されることによってこれからの活動資金を賄おうという考えだったようだがなぜかその計画が実現することはなかった。しかし、ここでの苦い経験が後の活動に良い方向で影響したのは間違いない。

下の〈表1〉表は昨年度までの活動を挙げたものである。

〈表1〉2013年度までの権ゼミによる十分杯の広報活動の内容

| 日付 | 場所 | イベント名・活動内容 |
|----------------------------|--------------|-------------------------|
| H23, 6月14日 | 長岡大学 | ヒューマンパワーアッププロジェクト |
| 10月22, 23日 | 長岡造形大学 | 長岡デザインフェア2011 |
| 10月31日 | | 十分杯HP作成 |
| 11月19日 | フェニックス大手イースト | まちなかキャンパス |
| H24, 5月から 毎月8日 | アオーレ長岡 | オープニング記念市民交流事業 |
| 6月12日 | 長岡歯車資料館 | アドバイザーの方々へ十分杯の取材 |
| 7月24日 | 長岡郷土資料館 | 長岡郷土資料館の見学 |
| 10月6日 | アオーレ長岡 | うんめえ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～ |
| 12月20, 22日、 H25, 1月8, 9 | アオーレ長岡 | アンケートの実施 |
| H25, 2月 | アオーレ長岡 | 地物関連のイベントでの活動 |

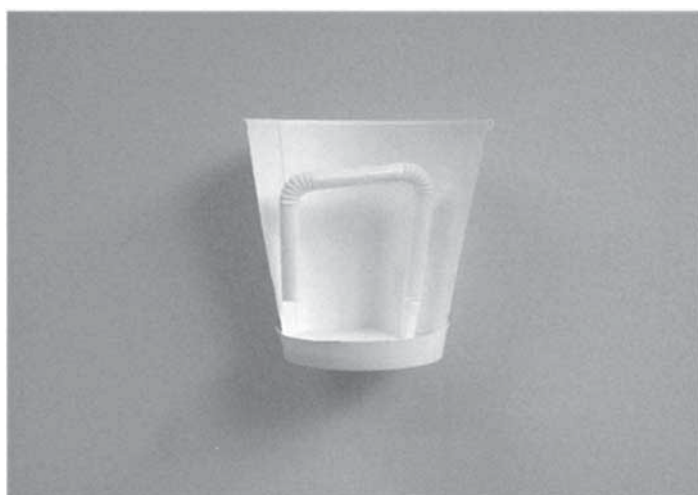
(出所) 宇尾野大樹他 (2013) p.281

一昨年、先輩たちが自ら十分杯の説明を初めて行ったのが長岡造形大学で開催された長岡デザインフェア2011だった。子どもたちに分かりやすく、楽しんでもらえるように権ゼミ独自の紙コップで作る十分杯を開発した。たかが、紙コップの十分杯だが、いざ簡単に作れる十分杯を考えろと言われてすぐに思いつくようなことはなかなか無いだろう。これは先輩たちの努力の賜物の他ならない。この時のノウハウを私自身もお客様の前で説明する際、教えて頂いた。

〈図19〉長岡デザインフェア2011の様子



〈図20〉権ゼミオリジナルの紙コップの十分



昨年度の主な広報活動は5月から毎月8日午後13時から16時までの3時間をかけてアオーレ長岡で広報活動を行うことだった。私自身初めのうちはうまく説明ができず、アドバイザーの方や先輩達が見よう見まねでやってみたり、図を使って説明をしたり、実際の十分杯を使って実演したり、紙コップで作った簡単な十分杯を使い解りやすいように説明したりした。後半からは1人でもできるようになり、余裕が持てるようになった。始めた当初は10人にも満たなかったが、8月ごろから来客数が増え始め、平均して20人ほど来るようになった。

また、来客数を増やすために自分たちも始めのうちは〈図18〉チラシ、ポスターの作成などをしたりしてみたものの、遠くからブースを見てみると何をしているのかがわからないことを指摘されたのをきっかけにのぼりを作ろうと考えた。長岡市の支援を受け、のぼりの作成は長岡造形大学の鈴木研究室に依頼した。

〈図22〉は出来上がったのぼりであり、我々の活動の目印となった

〈図 2 1〉チラシ



〈図 2 2〉のぼり



(注) 長岡造形大学の鈴木研究室の方々が作ったのぼり

10月6日には「うんめえ酒にアオーレ～越後長岡酒の陣～」に初めて参加した。2012年に参加したイベントの中で最も大きなイベントだった。

来場者は約5,000人で、我々のブースには200人近くの来客者がいた。アドバイザーの方から借りた貴重な十分杯の展示や十分杯の説明・実演などをお客さんに体験していただいた。大変な混み合いで休む暇もないほどだった。その結果近隣のお店で実際に杓の十分杯と鉄でできた高価な十分杯が全て完売したと後程聞き、我々の活動の中で初めて明確な結果が見えた活動であり喜ばしいことであった。

〈図 2 3〉昨年度の酒の陣の様子



〈図 2 4〉昨年度の酒の陣の様子 2



2. 1. 1 昨年度行ったアンケート調査

12月にアンケート調査を初めて行ったがアンケート調査の計画はすでに活動を始めた時から盛り込まれていた。しかし、ちょうど講義で勉強していたものの、ほとんどノウハウがなく、なかなか実行できずにいた。皆、広報活動でお客様と話をしている十分杯の認知度が低いということは体感的にわかっていたものの、どれだけ低いかは誰も具体的な数字を明確に知らなかった。そして、中間発表（11月17日）の場で、内藤学長から見事にアンケート調査の必然性を突かれた、これで火がついた。

長岡大学の先生や地活をサポートしてくれる地域研究センターの職員の方から本学の教員からも正しいアンケート調査の仕方、お客様が読みやすい文章に修正した方が良く、様々なアドバイスを貰い、以前の質問に新たに手を加え、約200人を目標としたアンケート調査を行うことにした。そして12月20日、22日にアオーレ長岡で十分杯の認知度調査を初めて行った。およそ2時間のほどアンケートの調査をした。今までのイベントと違いお客様がいらっしゃるのを待つという形ではなく、こちらから積極的に話しかけていくという形式だったので戸惑う学生もいて、スムーズに作業することができなかった。お客様の中にはいきなり話しかけられ、怪訝に思う人もいたようでそれに私も二の足を踏んでしまった。

また気温がとても低く雪が降っていたこともありアオーレにほとんど人がいなかったため、アンケート調査はとても大変だった。

アンケートは年明けにも行い、1月8日、9日と活動をした。8日は毎月の広報活動の日でもあったため、活動と共にアンケート調査を行った。まだまだ雪が凄くアオーレに来る人は少なかったが、計4日間のアンケート調査を行い最終的に206人から回答を回収することができた。

質問内容は以下の通り7つである。

問1 あなたの性別は。

問2 あなたの年齢は。

問3 お住まいの地域はどこですか。

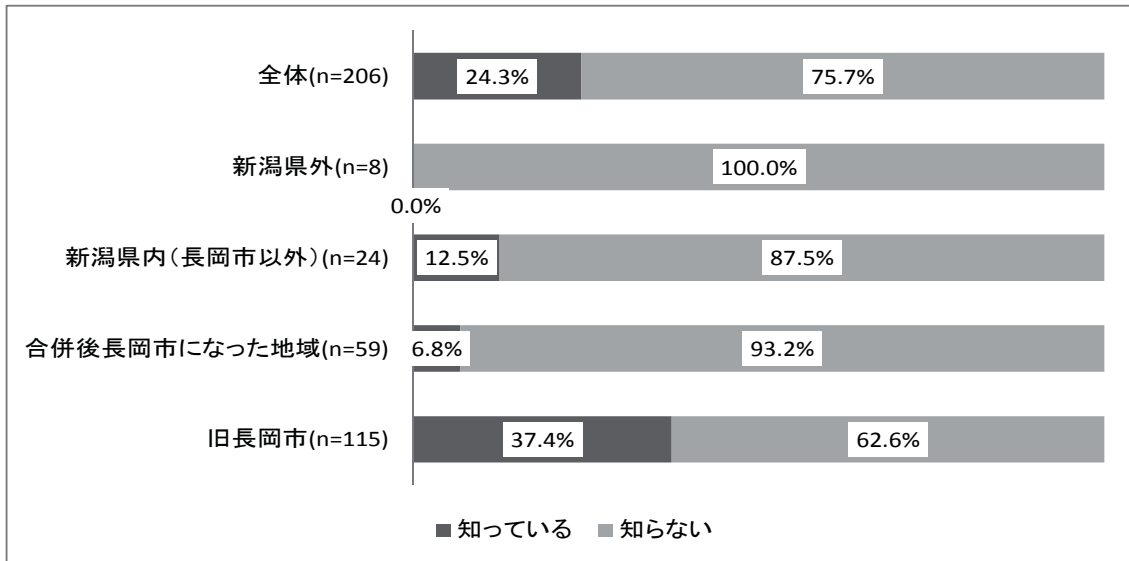
問4 十分杯を知っていますか。

問5 （問4で「知っている」に○をつけた方。）どこで十分杯を知りましたか。

問6 十分杯を持っていますか。

問7 （問6で「持っている」に○をつけた方。）どのような用途で使用していますか。

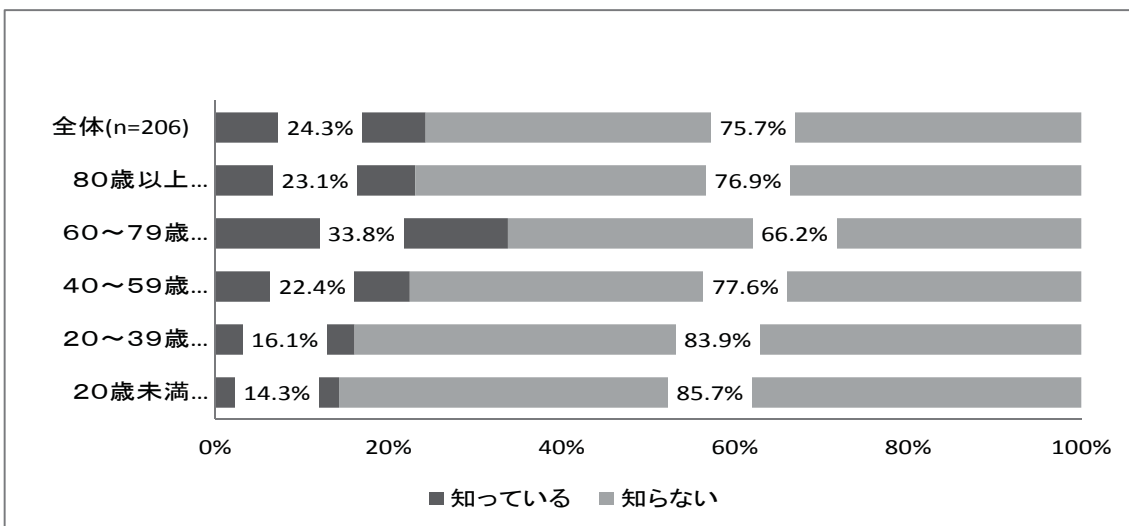
〈図 2 5〉 地域別の認知度



〈図 2 5〉は地域別の認知度を調べたものだが、調査地が旧長岡市になるのでやはり旧長岡市に住んでいる人が最も多かった。もっと正確な数値を出すには様々な地域でアンケート調査を行う必要があると思われる。

ただ全体で見ても旧長岡市、合併後長岡市になった地域が多く、やはり長岡にゆかりのあるものだと改めて感じた。長岡市以外の地域の認知度が低いので今後は長岡市以外の地域にどうやって十分杯を知ってもらおうかを考える必要がある。

〈図 2 6〉 年齢別の認知度



〈図 2 6〉は年齢別の認知度を表している。知っていると答えた人の中で60歳～79歳の人が一番多く知っていた。それから年齢が低くなっていくにつれて認知度も低くなっている。十分杯が何十年前には知られて割と多かったが時がたつにつれて知っている人が少なくなっているということがわかった。

アンケートの集計結果から旧長岡市在住の60～79歳代の方に一番認知されていることが分かった。

また、十分杯をどこで知ったかという質問に対して、新聞・テレビで知ったという人が8人と一番多かった。チラシ・ポスターに力を入れていきたい。十分杯を持っていない人が83%以上いるのでこれに対する改善策も検討していかなければならないと思った。用途別は7票しかないがほとんどはお酒を飲むときに使い、少数ではあるがインテリアや美術品として使うという答えもあった。

2. 1. 2 十分杯が抱える問題

アンケートの結果を踏まえ、私たちは現在の十分杯の認知度不足の原因を4点ばかり取り挙げた。

- ① 杯として実用性がない点：理由としては十分杯には飾りがあるためお酒を飲みづらい、飾りがあるため収納や洗浄する際に苦労する。ビールやワインを飲むのに適していない、魅力が伝わりにくいから。
- ② 若い人にほとんど知られていない点：未成年はお酒が飲めないため馴染みがあまりない。若者の酒離れ、子どもや若い人たちが十分杯について知る機会がない。
- ③ 陶器製のものでは買う人、使い道に限られる点：買う人は年配の方がほとんど。十分杯についての知識がある人しか買わない。デザイン性がない。量産ができない。新潟に作る場所がない（焼きがま不足）、時代が変わったため。
- ④ 長岡市自体が広報活動に消極的なある点：他県・他国にもあるものだから。十分杯を知らないから。十分杯以外に多くの観光資源（長岡まつり大花火大会、越後山古志の牛の角突き、公営越後丘陵公園、各種の地酒など）があるため埋もれている等々の問題点があると言える。最近は大手通りのスクリーンで十分杯のCMが流れていることは喜ばしいことである。

2. 1. 3 認知度アップの提案

アンケート調査の結果、抱える問題等を見て昨年度末に認知度アップのために提案した内容が下の①～⑧である。

- ①動画サイトに十分杯の動画をアップロード
- ②ブログ、Twitterの利用
- ③インターネットでの販売
- ④十分杯コンクールの開催
- ⑤ゆるキャラの製作
- ⑥学内での活動
- ⑦小学校などで十分杯の説明をする
- ⑧十分杯の紹介動画を放送していただく

2. 1. 4 昨年度の活動で得られたこと

- ・ 十分杯の認知度を少しばかり上げることが広報活動行うことによって達成できた。
- ・ 十分杯の活動を通してお客様に説明しなければならないので長岡の歴史について勉強した結果、長岡藩の歴史を知ることができた。
- ・ ゼミ生同士の交流を深める事ができた。
- ・ イベントに来たお客様、協力していただいた方たちの年齢層はバラバラあったが、それによってさまざまな年齢層の方とかかわりを持つことができた。
- ・ ゼミナールのメンバーで一つの方向を向いて何かをやることは非常に困難だが、広報活動を一年間同じメンバーでやり遂げることができ、仲間と協力することの難しさ、大変さ、楽しさを知ることができた。

2. 1. 5 昨年度の活動での反省点

- ・ ゼミ生全体の活動に関する意欲が低く、準備不足になってしまい、4月に出店予定だったアオーレ誕生祭に出店することができなかった。
- ・ 今年度の初めての活動では、緊張してしまい、来場されたお客様に対して十分な対応、説明をすることができなかった。
- ・ 広報活動を予定していた日程が平日だったため、来場者が少なかった。
- ・ 全体的に来場者に対するアピールがたりなかった。
- ・ 悠久祭に参加しなかった。

2. 2 今年度の活動

昨年度まではまず（アオーレでの活動写真）市民の皆様に十分杯とはどのようなものなのかを知ってもらい、そしてそのために見て触って実際に体験してもらった。なぜならそのような活動が十分杯というものを町おこしに使うためにベースとなると考えたからである。また我々が十分杯を直接作る技術も資金もない。ただ広めることと、長岡の経済がわれわれの活動以前より少しでも元気が出ればよいと思い、十分杯をモチーフ（エコバック、クリアファイル等々）とした関連商品の開発を漠然と考えていた。

今年度は昨年度までの活動からより発展させたことに取り組もうという目標があったものの、なかなか具体的な案が固まらず、活動に参加できる人数も昨年までと比べて減少してしまう、活動の中心になるべき4年生の就職活動が長引くなど今までは無かった問題が出てきてしまった。それにより、活動のスタートが非常に遅くなり、ようやく取り掛かり始めたのが8月の下旬だった。

今年度の活動は全部で六つある。まず始めに、本学の学食協のショーケースの掃除をし、地域活性化のアドバイザーの太刀川喜三氏と内山弘氏から借りた貴重な多くの十分杯を飾りつけることだった。若者の認知度が低いということが昨年のアンケートで分かったため、少しでも若い人の目に触れることが重要だと考えた。

また本学はまちの駅でもあり、地域の人たちの交流の場なのである。しかも悠久山は歴史的な遺跡がたくさんあるところである。そこに位置している長岡大学まちの駅として長岡藩ゆかりの十分杯を展示することは大変有意義なことである。少なくとも長岡大学の学生ならば必ず十分杯の存在はわかるようになったと確信している。

〈図27〉飾りつけた学食協のショーケース



2つ目は十分杯の説明が飾るだけでは不十分なので、パネルづくりを地域研究センターの方にアドバイスをもらいながら作成した。〈図28〉が実際のパネルである。



長岡大学

十分杯と権ゼミナールの活動

長岡と十分杯の関わり

長岡藩を根底から支えていた精神は二つあったと言われています。一つが常在戦場（常に戦場にいる心構えを持って生き、ことに処す）の精神であり、もう一つが十分杯（戒め、節儉）の精神ですが、現在では十分杯の精神はあまり知られていません。

長岡藩と十分杯の出会いは三代藩主牧野忠辰公（まきのただとき 1665-1722）の時代にまで遡ります。

忠辰公以前からも武士は簡素な生活を旨としていました。ところが、元禄時代（1688-1704年）になると貨幣経済が発展し、戦国期の苦しい時代から民衆も生活水準が向上し、生活必需品以外を購入する余裕もでき、町人の生活が奢侈化するにつれて武士たちも同調し華美な生活をするようになりました。長岡も例外ではなかったでしょう。そこで忠辰公はこれを憂い、文武の奨励や制度の改定をして、藩士の引き締めをはかりました。その象徴が十分杯でした。‘満つれば欠く’という処世訓を示したものです。

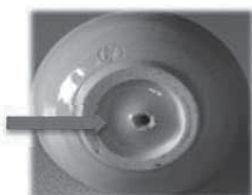
忠辰公が塚越という領民（おそらく庄屋）の持参した十分杯に感銘を受けて詩を詠み、処世訓としたことから長岡に十分杯が知られることになりました。

十分杯の特徴



飾りの中に管が通っている

底に穴が開いている



十分杯には、ほかの杯と大きく異なる点が3つあります。

- ① 杯の中に「かざり」という突起がある。
- ② 杯なのに底に穴がある。
- ③ この杯に一定の量（8分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまう。

十分杯の今日的意義

日本には資本主義という非常にきれいな花が立派に咲きましたが、欲という棘もたくさんできてしまいました。今の時代にこの欲を全部否定することはできないし、また、してはならないでしょう。しかし、不要不急のものに対する欲は、単なる欲ではなく、過ぎた欲、つまり過欲になります。欲しい物を持ってはいけないということではありません。必要な範囲で持つようにしようということであり、人は心に欲が出来てはじめて動き出します。そして、欲はどんどん大きくなっていき、やがては欲が人を食ってしまうこともあります。欲に食われずに、純粋さと節度を保ち、過欲に走らずに蓄えを持った人として生きていくために十分杯を心に持ち歩くのはどうでしょうか。

昔から日本には「足るを知る」という言葉があります。物が溢れる時代に多くの人は自分の欲求を満たすために、前ばかり見て進んで行き、それまで持っていたものを振り返って見ようとしません。なんとなく、幸せから遠ざかっていくような気がします。



権ゼミは、長岡の文化遺産である「十分杯」を活用し、まちおこしをしようと活動しています。しかし、まだまだ市民の認知度が低いという難題があります。

そこで、広報活動（小中高での広報活動、市民対象の講演・実演会）、観光コースの開発、観光商品の開発などを行っていきたいと思っています。

長岡大学 権ゼミナール

3つ目は10月5日には昨年も参加させて頂いた越後長岡酒の陣で広報活動を行った。今年度も多くの方がアオーレ長岡に来場したアドバイザーの内山さん、太刀川さんのご協力で何とか無事に終えることができた。

昨年度を大きく上回るお客様が来場し、私たちのブースは目が回るほどの忙しかった。わがんせという会社の方にも広報活動に協力していただいた。イベントの中では来場されたお客様に様々なアイデアを提案してもらった。正月の飾りとして活用したい、十分杯の説明会をしてもらいたいなど貴重な意見をいただくことができた。

後日、長岡市の観光企画課の方の話ではその来場者数は昨年度よりも1500人増の約6500人で、お酒を飲むためのチケットも昨年度の販売数を上回ったそうである

〈図29〉越後長岡酒の陣入口



〈図30〉今年度の越後長岡酒の陣の様子



〈図31〉展示した貴重な十分杯



〈注〉展示した十分杯はアドバイザーの太刀川氏のもの。

4つ目は10月下旬に昨年度は参加することができなかった本学が毎年開催している学園祭に参加した。後日、来場した方の中で新潟日報の2013年11月9日投稿欄に活動について投稿した方がいた。

〈図32〉新潟日報の投稿記事

今に伝わる十分杯の教え

弥彦村
橋川 賢子(49)
派遣社員

子どもが大学に進学してから、大学祭に興味を持つようになりいくつか見学に行ってきた。

今日も元気でやっているかしらと、めったに連絡してこない子どもに思いをはせながら着着たちを睨んでいると、はつらつとした笑顔に元気をもらえます。

その中で興味深かったのが、長岡大学のあるゼミの十分杯についての展示でした。十分杯とは杯のまん中に裝飾があり底に小さな穴があいていてサイホンの原理の細工がしてある、お酒を飲むときの杯です。

それがなんと八分目にあらずかしく思ったのでした。

なみ注ぐと底の穴から二氣に漏れてしまうのです。私はただ単純にその仕掛けが面白いと思ったのですが、昔の長岡藩の殿様が藩士や領民のせいたくを戒め、ほどほどの生活を奨励するために取り入れたのだそうです。杯に込められた心に自分の生活を振り返り、反省させられました。

ゼミでは地元で伝わるこの素晴らしいアイデアの杯を活用して、町おこしに取組んでおられます。先生の教えが形として残るものを利用した町おこし。なんと素晴らしい発想なんだろうと感心しました。

しかもそれを指導しておられるのが外園から来られた先生であることに驚き、あらためて自分の無知を恥

5つ目は長岡市のコンベンションセンターから依頼されたチラシ作製である。これは12月14日に行われた今年度の学生による地域活性化活動の報告会を見たコンベンションセンターの方から店内で販売されている十分杯についての詳しい説明書きがほしいということで依頼を受けて現在制作中である。

2. 3 活動の中での疑問（歴史的な背景、整合性）

ただ私は2年間活動していた中でどうしてもぬぐいきれない疑問があった。仕組みの科学的な証明は活動にとって私にとってあまり重要なものではない。本当に今まで勉強してきた十分杯と長岡の歴史は本当に正しいのか私は確かめたかった。この6つ目の点が今年度私自身の最大のテーマだった。

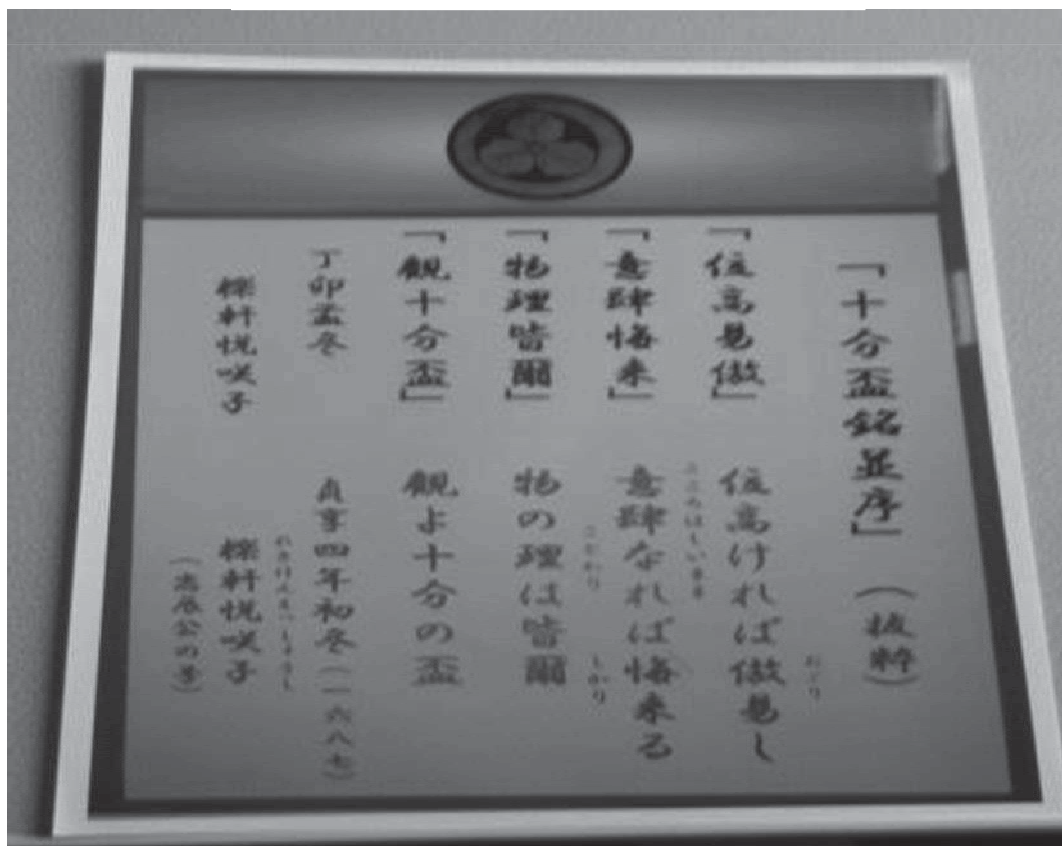
3. 長岡とのかかわり

3. 1 十分杯がいつ頃、どのような経緯で長岡に伝わったのか

長岡に十分杯が入ってきたのは1687年（貞享4年）頃である。この時の藩主が長岡藩の内治整備の英主といわれている三代藩主の牧野忠辰（1665～1722）であった。

この時の十分杯と忠辰のエピソードについて書かれているもので一番多いものは「長岡藩三代藩主牧野忠辰は元禄時代になり、今まで質素儉約を心掛けていた藩士たちにゆりみが出てきてしまった。これを十分の杯を作らせ、十分杯を使うことによって藩士たちの引き締めを図った。十分杯という杯は径二寸、三寸ほどで杯の中央には柱が経っていて中に細い管が通っており、小さな穴が杯の内外にある。」このような文章は本によっても多少違うが、どの本にも共通している点がある。それは「牧野忠辰が十分杯を作らせた」という点である。アドバイザーの方のお話を聞くと実際はこの文章は間違いであることが分かった。牧野忠辰が作らせたという文章ではまるで十分杯という杯を三代藩主が考え、作り出したようになってしまっている。しかし十分杯というものはこの時代には既にお土産物として売っていたようだ。そのお土産を塚越氏（おそらく庄屋）という方が泉の国で手に入れ、お殿様に献上した。十分杯を大層気に入ったお殿様は十分杯について詩を詠み、その詩を書記官に書かせた。

〈図33〉藩主作の詩 抜粋



（出所）太刀川喜三氏製作資料

3. 2 当時の江戸の経済事情

当時ゆっくりと向上してきたのが農民たちの生活である。今までは徳川家康の「百姓は生かさぬよう、殺さぬよう」言葉があるように農民たちはぎりぎりのところまで搾取されていた。それに変化があったのは家綱が統治時の17世紀半ばごろだと言われている。そのころには農民たちは年貢を納めても若干ではあるが食べる分以外にも作物を自分たちのものにすることができた。その作物を売り、ほかのものを買うことができるようになっていった。その後は農民たち相手に商売をする新興商人たちも台頭した。もちろん新興商人たちだけでなく、ある程度特権を持った商人たち（呉服屋など）も金儲けをし、資産を増やしていった。

しかし、地主階級を除いて農民たちはある程度武士階級に制限をつけられる生活を余儀なくされていた。百姓は雑穀を多く作り、米を食いつぶすことのないようにと指示されていた。飲酒、喫煙、豆腐、うどんなどにも制限を付けた。村の生活は自給自足が原則で、田んぼを耕している農民は米を食うことができるが、山で生活している農民は正月でも米をなかなか口にするにはできなかった。

元禄時代（1688～1703年）になると豪商が表れ始めた。豪商たちは江戸、大阪、京都に贅沢な屋敷を造り、高級な物を口にし、商人の妻たちは衣装比べをするようになった。一般の町人たちの生活にも余裕が出てきて「人間万事金の世の中」という言葉まで生まれた。だが、都市に住んでいる上流階級の人々は良いものを食べ過ぎてカロリー過剰などで病気になってしまった。農民たちは発酵食品を摂取することによって簡素な食事でも偏食なく健康を維持することができた。

3. 3 牧野忠辰の統治時の長岡の経済事情

長岡藩の財政もそこまで余裕があったわけではなかったようである。忠辰は1674年に諸士法制を定めて親子、兄弟以外に年始などに贈り物をしてはならず、参勤交代で中央へ赴く際にも土産、贈り物はしてはいけないと定めていた。しかし、主君の体面を維持するために相当な金額の贈り物をしていたようである。

藩士たちも全員が良い生活をしていただけではなく、武士は禄高の大きさによって米が配分されるため禄高が低ければ低いほど苦しい生活を余儀なくされ、財政難によって配分される量をさらに減らされると生活は一層苦しくなった。

3. 4 長岡藩の三代藩主とはどのような人物だったのか

三代藩主牧野忠辰は牧野家中興の英主の1人といわれている。忠辰は軍法、町中掟、郷中掟、工業、消防、衛生等々藩士、民衆の法律の基礎となるべきものを制定し、長岡藩の基礎を作った人物である。1722年に忠辰は亡くなった。この次の藩主である牧野忠寿（ただなが）は長岡城の一部に忠辰を祀った。同年9月には「蒼紫霊神」が1733年には「蒼紫大明神」の神号が贈られた。現在は蒼紫神社に恵比寿様と共に祀られている。

3. 4. 1 略歴

1665年（寛文5年）江戸の藩邸で生まれた。彼は父親が亡くなってしまったため、わずか10歳で家督を継いだ。忠辰は聡明で、謹厳、早くから文武の道に興味を持ち、文を先代のころから牧野家に入りしていた儒学者から学び、刀、槍、乗馬も家臣たちから学び習得した。忠辰は自ら進んで、長岡藩の藩風である常在戦場を家臣たちに示し、領民に対しても文武を奨励した。忠辰が自ら家臣たち、村をまとめている役人や僧侶たちにもしばしば講義のようなものを行っていた。

1722年（享保7年）に江戸藩邸において58歳で亡くなった。忠辰が長岡藩を納めていたのは48年間であり、歴代藩主の中で2番目に長い。

5代将軍徳川綱吉にも江戸に向いて論語の講義を行ったこともある。

3. 4. 2 忠辰が改定した法律

・2代藩主の治めていた約20年間で4度の水害が起こり、農民たちのなかに年貢を納めることができず人たちが増加した。年貢を納めない、納めても足りないなどの農民には今までの法律では水牢など命にかかわる酷い刑罰を課していたが、忠辰はこれを無くし年貢が納められなかった農民はその分を親族預かりなどにして刑罰を軽くした。

・民の疫病を予防するために医師をあちこちに派遣して民衆の体の調子を聞き、時には人参などの高価な薬も配布した。

・食料の備蓄を奨励して飢饉などの食糧不足に陥った時にはある程度年貢を減らし、おかゆの配給を行った。飢饉によって起こる問題に対してもすぐに対策を立て、役人を派遣して盗賊、犯罪の横行をなるべく防いだ。

・初めて新潟港に奉行（役所）を設置。貿易の発展のために様々な施設を作らせて基礎を築いた。

・質屋などで金品の貸し借りするときの利息を定め、暴利を防いだ。

・捨て子を生むことを禁止した。孤児がいる場合はその町、村での責任として養わせ、希望者の養子にすることもあった。

これ以外にも挙げればきりがなほどの藩の決まりごとを作った。

3. 4. 3 武の面での功績

1681年越後騒動と呼ばれている事件が起こった。この時の高田藩藩主松平光長（当時60歳）の跡継ぎ争いが事の発端である。一度は幕府が高田藩に対し裁定を下して跡継ぎを決め落ち着いた。しかし、1680年徳川綱吉が第五代将軍になると将軍の権威復活のため政治に積極的に取り組み始める。その取り組みの中の一つが一度は決定した高田藩の処分を変更だった。この処分変更により高田藩藩主松平光長は改易され、幕領になり、周りの藩主たちが交代で治めた。{綱吉が将軍になる前の一度目の裁定を下したと言われているのは松平家の親戚にあたる4代将軍家綱の大老（将軍の補佐役、執政官）だと言われている。4代家綱の政策の決定はほとんど優秀な家臣たちに任されていた。そのため酒井忠清の権力は強かった。家綱が亡くなった後、忠清は将軍綱吉と対立し、忠清は大老の職を追われた。忠清側についていた人間は地方に飛ばされた。（後の高田藩藩主の稲葉氏は京都所司代を罷免）}

改易によって松平光長が治めていた領地は没収された。この時の領地の受け取りを榊原政倫（初代村上藩藩主）、牧野忠辰、前田正甫（越中富山藩2代藩主）の三藩主に幕府は命じた。

牧野忠辰はこの時の年齢はまだ17歳だったがこの知らせを江戸で受けた忠辰は直ちに使いを長岡に飛ばし、7月3日に帰路につき、同月12日に長岡に入った。その日のうちに藩士たちを城に集め、出発の準備を命じた。そして18日に総勢3千5百人の兵を引き連れ長岡を出発した。行軍中の牧野軍は運悪く、立っているのがやっとな暴風に吹かれて士気を保つことが困難になってしまう。ここで忠辰は兵士たちの手を組ませ大きな鎖のようにして自ら先頭に立ち、掛け声を出しながら兵士たちを激励し、無事に行軍を続けた。さらに行軍中に馬のえさなどが足りないことを予測し、あらかじめ部下を派遣して倍の給金で人を集めさせ、兵糧を滞在する村に用意させた。道や橋なども先に検査させて破損しているところがあれば修復させた。これは一見すると当たり前のことかもしれないが、綱吉が将軍になりさらに武士たちは武から遠ざかり、戦は小さいいざこざを除けばない太平

の世の中でまだ17歳の若者が一週間あまりで準備を終え、3千人余りの兵士たちを無事に率いて幕府から任された役目も無事に果たすという手腕は称賛された。

武の面での功績は上で述べたとおりだが、忠辰は学問の面でも素晴らしかったと言われている。辰忠は成長するにつれてますます学問に熱心に取り組んだ。

3. 4. 4 忠辰の学問への姿勢

ここでどれだけ彼が勉強熱心だったかわかるエピソードを一つ紹介する。

忠辰は非常に勤勉でその読書欲を満たすために莫大な量の書物を読んでいた。とある家臣がこのままでは忠辰の健康面に悪い影響が出てしまうことを心配し、一言申し上げたところ、忠辰は笑ってこう言った「お前たちにはわからないだろう、私は不肖の身ながら天の命よって一城の主となった。私は民を良い方向に導き、村をきちんと治めて自分にまかされた職務を全うすること以外に何も望まない。ただ何もせずに長生きすることは恥じるべきことである。人の寿命は天によって決められる。勉強をするかしないかで寿命が決まるわけではない。これからはこの件に関してあまり口出ししないように。」と部下を諭したという。

3. 4. 5 普段の生活の忠辰にまつわる2つのエピソード

忠辰は厳格な人物ではあった。しかし、家臣の進言を素直に聞き入れる懐の深い人であったとわかる2つのエピソードがある。

忠辰が厳しかったのは日々の食事の味付けにも及んだ。忠辰はしばしば自ら調理場に入りして料理人に注意をすることもあった。そのため忠辰が調理場に来るたび料理人たちは緊張してしまって、仕事が進まなくなってしまう。このままでは駄目だと料理人の山本三郎右衛門という人物は忠辰が調理場に訪れたのを見計らってわざと火に熱湯をかけて調理場をサウナのようにした。調理場は非常に熱くなり、忠辰はとてもしることができなくなってしまい、部屋に帰りすぐに原因の山本三郎右衛門を呼び出してこのことを叱ったところ三郎右衛門はまず失敗について陳謝した後、「上様、まことに恐れ入りますが上様が調理場へ出入りしますと料理人たちが緊張してしまい、今回のような失敗が起こりやすくなってしまいます。恐れ入りますが料理人たちのために何卒出入りを取りやめて頂きたいとお願い申し上げます。」と三郎右衛門が進言した。これを聞きながら忠辰は苦笑いして三郎右衛門をこれ以上咎めることもなく、これ以来一度も調理場に入出入りすることはなくなった。

忠辰は普段からニンニクを好み、食事の時にはいつもニンニクを欠かすことはなかった。しかし、ニンニクにおいて家臣たちは忠辰に近くにいることができなくなり、さらにその匂いは城中に充満していて城の中のものは皆、迷惑していた。

耐え切れなくなった家臣たちは協議の結果、ついに家臣一同でニンニクを食べる事をやめてくれないかと忠辰に嘆願する。

その際についた理由は「ニンニクは非常に高価な食べ物で、毎日食べますと家計を圧迫する可能性があります。今後何卒ニンニクを食べる事控えて頂けませんか。」と家臣たちが申し出たところ、忠辰は微笑みながら「さようか」と言ってニンニクを食べるのを控えた。

しかし、その後狩りの途中ある村に立ち寄った忠辰たち一行は農家の家の軒先にたくさんニンニクがわらで編まれてつるされていた。これを見た忠辰は家臣たちを一通り見た後に「見てみる、藩の財政を圧迫するほど高価なニンニクがたくさんつるされているぞ。あの家はよほど裕福な家のような。」と苦笑いした。これを見た家臣たちは忠辰の言葉に一言も答えることができなかった。

この2つのエピソードを見る限り、部下の嘆願、進言を受け入れることがやぶさかでない

かったことは忠辰の懐の深さを窺うことができる

3. 5 三代藩主を尊敬した九代藩主とその証としての蒼紫神社

9代藩主牧野忠清は初めて中央の政権とのつながりを作った藩主である。三代藩主忠辰と双璧を成す長岡藩の中興の英主と言われている人物である。

1766年(明和三年)に7歳の若さで藩主となった。非常に聡明で幼いころから頭が良いと評判で決断力があり、人に対してはあくまでも厳格な人物だったが、懸命に公の仕事をこなし、家臣たちも厚遇した。忠清は22歳で奏者番(将軍の側仕え)、28歳で寺社奉行(全国の寺社の管理、宗教の統制)、33歳で大阪城代(大阪城に駐在、政務を担当)39歳で京都所司代に任命され、京都の治安に関する庶政、京都・伏見・奈良の町奉行の管理、近畿全域の訴訟の裁決などを行った。京都所司代を2年半務めた後、42歳で老中として幕府の財政、民政に関わった。忠清は若いころから中央の政権で要職についていたので領地に帰ることは少なく、家臣たちに藩政を任せていた。

3. 5. 1 芸術面での功績

忠清は芸術面において長岡に多大な影響を与えた。和歌については素晴らしい才能を持っていらしく、和歌、蹴鞠などを家業とした冷泉(れいぜい)家から相伝の免状を得ていたほどである。彼の代表的な作品に「戦いの庭にあるぞと常に只、思う心を保てもののふ」という歌がある。これは牧野家が初代以前の牛久保という地にいたころから掲げていた常在戦場という牧野家の家風を表したものを歌にしたものである。

忠清は墨で雨龍(あまりょう、あめりゅう)を書くのが非常に得意でそれにちなんで別名「雨龍のお殿様」とも言われている。(雨龍とはトカゲと龍の合いの子で縁起が良いとされている架空の生き物のこと)茶道についても京都の文化を長岡に伝えている。

彼と親交が深かった人物に松平定信がいる。忠清が幕府の要職につけたのは定信の影響が大きかったと言われている。この両者は性格や趣味において気が合うところが多く、のちに親戚関係となる。忠清は72歳に江戸藩邸で亡くなった。彼が藩主であった期間は牧野家の当主の中でもっとも長い。

3. 5. 2 蒼紫神社に3代藩主忠辰を祀る

1772年の三代藩主の50回忌に向けて大明神の神号の贈進と現在の蒼紫神社の建設の取り組みが始まっていた。当時は太平の絶頂だったとも言われ、この取り組みは長岡藩の当主たちが行ってきたように忠辰の功績を称え、藩全体を引き締めるためにも必要なことだった。

しかし、藩の財政は非常に悪化していた。藩主の政界での活躍は支出が多く、1763年(明和元年)から米の借り上げ、1768年(明和五年)には凶作で新潟において打ちこわしが起こってしまうなど長岡は決して良い状況ではなかった。

藩の財政からも資金を捻出、藩士からも集めたが足りない。そこで忠清は明神様が長岡藩に幸福と繁栄をもたらし、藩の安全をつかさどる神であることを領民に知らせて、領民たちが金額の多い少ないにかかわらず手伝いを申し出るようならば「人別目録」にその者達を記載し、新しくできる社寺に収めることを領民たちに約束した。1771年(明和八年)には忠辰に大明神の神号が贈進され、現在の蒼紫神社は1781年に約13年の歳月を経て完成した。完成までに時間がかかってしまったのは、材料の調達に時間がかかってしまった、資金集めがうまくいかなかった、用材を乾燥させるのに時間がかかってしまったなど諸説存在する。

3. 6 さらに長岡市の発展に尽力した牧野家15代当主牧野忠篤

牧野忠篤は戊辰戦争で焼け野原になった長岡の復興が終わった後、長岡の発展に尽力した人物である。

彼は15歳で子爵となり、明治39年に長岡が市制になると36歳で初代市長に就任した。その際に日本を代表する陶工であり、真葛焼きの創始者として有名な宮川香山に十分杯の製作を依頼し、その十分杯を江戸の有力者たちに配ったと言われている。また教育にとっても力を入れていた人でもある。

おわりに

十分杯とそこに含まれているメッセージは長岡藩を治めてきた牧野家において常在戦場の精神と同じように脈々と受け継がれてきた。その証拠に当主たちは何らかの形で十分杯を活用している。他の地域にも十分杯と同じような物はあっても、約300年にわたって伝えられている地域というのは無いだろう。十分杯は長岡の大事な文化財と言えるのではないだろうか。

権ゼミナールで十分杯の広報活動を行った2年間は私にとって大学生活を変えてくれた2年間だった。アオーレ長岡を中心に広報活動を行ってきたが、様々な人と交流して、ほかの大学ではおそらく体験することができなかった様々なことを経験することができた。活動していた時のことを思い出すと懐かしく、もう少し何かできることがあったのではないかという後悔もある。

今年度で私は活動を終えることになってしまうが非常にやりがいのある活動だった。来年度からの後輩たちにもこの活動をつなげて行ってほしい。そしてこの十分杯というものが長岡を少しでも元気にする材料となれば良いと心から思っている。

参考文献及びウェブサイト

- 朝尾直弘、石井進、鹿野政直、網野善彦、早川庄八、安丸良夫（1994）『日本通史
第13巻』 近世3 岩波書店
- 朝尾直弘、赤井達郎 木村礎、桑波田興、葉山禎作、秀村選三、藤井讓治、藤井学、安
岡重明、渡辺信夫（1994）『日本歴史10』 近世2 岩波書店
- 磯貝文嶺、吉澤俊夫（1998）『長岡・柏崎の歴史』 郷土出版社
- 稲川明雄（2004）『長岡藩』 現代書館
- 内山 弘（2011）『十分杯（改訂版）』 長岡歯車資料館
- 蒲原拓三（1980）『長岡藩史話』
- 坂本辰之助（1980）『牧野家家史』
- 進士外編（1980）「江戸（中）」『図説日本文化の歴史』 小学館
- 長岡市（2004）『長岡歴史辞典』
- 長岡女子師範学校附属小学校、長岡市小学校教育研究会（1985）『長岡郷土読本
下巻』 目黒書店
- 長岡市（1998）『ふるさと長岡の人びと』
- 本山幸一（2006）『越後長岡の江戸時代』 高志書院
- 山口充一（1977）『郷土ながおか』 北越書館
- 横田冬彦（2002）『天下泰平』 講談社

- 「石垣島観光ナビ」 http://www.ishigaki-navi.net/p_chawan.html
- 「漢字Q&Aコーナー」 <http://www.taishukan.co.jp/kanji/qa11.html>
- 「十分杯を知っていますか？」 <http://www.jubunhai.com/>
- 「足るを知る」 <http://www60.tok2.com/home/gojinka/taru.htm>
- 「デジモバ」 <http://www.digimoba.com/products/chawan/chawan.html>
- 「長岡大学」 <http://www.nagaokauniv.ac.jp/>